

# 大圓寺石仏群(目黒区)

目黒駅近くの行人坂





目黒川架橋供養勢至菩薩石像/目黒区指定文化財



行人坂の由来

## 目黒川架橋供養勢至菩薩石像 (区指定文化財)

大円寺境内

下から台座 (97cm)、蓮座 (20cm)、頭上に宝瓶ほうびょうのついた宝冠をかぶり、両手合掌、半跏趺坐はんかふざの勢至菩薩像 (52cm) の3段になっています。台座の前面と両側面に、江戸中期における目黒川架橋のことを語る銘文が刻まれています。

銘文によると、宝永元年 (1704) に西運という僧が目黒不動と浅草観音に毎日参詣し、往復の途中江戸市民の報謝をうけ、兩岸に石壁を築いて、雁齒橋を架けたことがわかります。

目黒川架橋の史実を物語る貴重な資料です。

平成3年3月

目黒区教育委員会

寛永の頃、出羽 (山形県) の湯殿山の行人が、このあたりに大日如来堂を建立し修行を始めました。しだいに多くの行人が集まり住むようになったので、行人坂と呼ばれるようになったといわれています。

平成11年11月

目黒区教育委員会



大馬天

大馬天

大圓寺式場

目黒別荘園

大馬天



だいえんじ  
大円寺 (天台宗)

下目黒1-8-5

この寺は「松林山大円寺」といいます。寛永のはじめ、湯殿山の大海法印が寺の前の坂（行人坂）を切りひらき、大日金輪を祀って祈願の道場を開いたのがその始まりと伝えられています。

本寺には、「生身の釈迦如来」と言われている木造「清涼寺式釈迦如来立像」（国指定文化財）、木造「十一面観音立像」（区指定文化財）、徳川家の繁栄と江戸発展守護のための「三面大黒天像」（山手七福神の一つ）などが安置されています。

明和9年2月(1772)、本堂から出火、江戸六百余町を焼き、多くの死者を出しましたが、その供養のために造られた「釈迦三尊・十六大弟子、五百羅漢の像等の「大円寺石仏群」（都指定文化財）が建てられています。また阿弥陀堂には「木造阿弥陀三尊像」（区指定文化財）や八百やお七の火事にまつわる西運上人の木像、お七地蔵などが祀られています。

境内には「行人坂敷石造道供養碑」（区指定文化財）、「目黒川架橋供養勢至菩薩石像」（区指定文化財）、西運の墓、などがあります。

江戸の面影を残している行人坂の景観や老樹古木のしげる境内は緑の自然と古い歴史が薫る静かな美しい浄域を守っています。

平成3年3月

目黒区教育委員会

# 大圓寺の指定文化財

- ◎鎌倉時代(国重文)
  - ・生身の釈迦如来立像(一躰)
  - ・白銅菊花双雀鏡(二面)
  - ・結縁交名断簡(三片)
- ◎江戸時代(都重文)
  - ・石佛群五百羅漢像(五二四躰)
- ◎江戸時代(区重文)
  - ・行人坂敷石造道供養碑(一基)
  - ・阿弥陀三尊像(三躰)
  - ・目黒川架橋供養勢至菩薩像(一躰)
- ◎藤原時代(区重文)
  - ・十一面観音立像(一躰)
- 八百屋お七、吉三の墓碑
- 江戸裏鬼門守護開運大黒天
- 新東京百景指定(東京都指定)

文化財は国民の財産で世界の文化遺産です。皆で守りましょう。



都郷土資料 大円寺石仏群の標柱



本堂











正面が石仏群









## 都郷土資料 大円寺石仏群

所在 目黒区下目黒一丁目八番五号 大円寺  
指定 昭和四十五年八月三日

明和九年（一七七二）二月に江戸市街地を焼いた大火があり、火元と見られたのが大円寺であった。大

円寺では焼死した人びとを供養するために、天明頃

（一七八一〜九）境内に五百羅漢像等を建立したと「新編武蔵風土記稿」は記述している。

しかし、判読できる銘文によると、明和の大火で死亡した者のみの供養ではなさそうであるが、江戸災害史の貴重な記念物であることには変わりない。

昭和四十六年三月二十五日 建設

東京都教育委員会



# 五百羅漢と

## 明和九年大火

明和九年（一七七二）二月二十九日行人坂大圓寺からあがった火の勢は、たちまち燃え広がりを、折りかちの強風にあおられ五日三晩にわたる大火となつてしまいました。飛び散る火の粉は市中の大半に及び、江戸九三〇余町（江戸の街の約三分の二）を焼き尽くしたのです。大火後亡くなつた人々を四千七百余人を供養するためにつくられた五百羅漢の石仏群は、それぞれの表情に特徴があります。大火で犠牲となつた人々の霊を慰めるために羅漢像の前の水を差し上げて供養して下さい。

この火災は、行人坂の大火（明和九年）と呼ばれ、振り袖大火（明暦三年）、車坂の大火（文政年間）とともに、江戸三大火災の一つとなりました。この年幕府は「明和九年」として、年号を「安永」と改元しました。











阿弥陀堂



# 木造阿弥陀三尊像

目黒区指定有形文化財  
昭和五十九年三月三十一日

彫刻  
指定

中尊阿弥陀如来像は来迎印らいごうを結び、左足を垂下した半跏はんかの姿、観音像は蓮台をもち左膝を立て、勢至像は合掌し右膝を立てた典型的な来迎形の阿弥陀三尊像であるが中尊が半跏座の姿をとる例は少なく珍しい三尊形式である。

三尊とも江戸時代の典型的な作風を示し江戸時代の仏像がいずれも小じんまりとしているのに対し気宇広大な特色を持っている。

また、両脇侍像蓮台の木札に明和七年（一七七〇年）大仏師桃水伊三郎等の銘があることも貴重である。

昭和五十九年八月

東京都目黒区教育委員会







釈迦堂/ここに重要文化財の生身の釈迦如来立像が収蔵されている





國寶  
生身の釋迦如來

身釋迦如來

淨財

# 釈迦如来立像

(国指定重要文化財)

京都清涼寺の釈迦如来像の模刻。鎌倉時代には、釈迦信仰の復古的な高潮によって盛んに作られました。大圓寺の釈迦如来像は、胎内から鏡や結縁者戒名等を記した紙片・女性の髪・木札などが発見され、鏡には「建久四年舟治氏乙犬丸」の線刻銘があり、鎌倉大仏を鑄た舟治氏と同姓の工人の名が記されています。年代の明らかな清涼寺式釈迦像の中でも建久四年（一一九二）は最も古い釈迦像です。生身の釈迦像として、像の胎内に人間の胎内にあるのと同様の五臓が、絹や錦の布で作られ、文書や経巻、宝玉などとともに納められています。



仏心閣



観世音菩薩と鐘楼堂



太鼓橋に使用されていた石材



摩尼車(まにぐるま)と子安(水子)地蔵尊





水子(水子)地藏尊

お祝りのすすめ

この世に生まれぬ間もなごごとく  
おまをすちやん

世の事を見らんとなく葬られた  
赤ら

お祖の、おまをすい水子たちが、お地  
蔵さまの御心をあまもりして、お  
楽しく明るいお洋土で安らかた  
幸せな日々を暮らせるようにお  
祈りし、おまをす水子の御養のお地藏  
さまをお祀りしませしやう。

みな様の幸せの為に

合掌

謹んで、かびら井 寺務所でお尋ね下さい。

行人坂敷石造道供養碑と庚申塔



# 行人坂敷石造道供養碑（区指定文化財）

大円寺境内

この供養碑は、高さ164cm。碑の上部に種子（梵字）キリーク、（阿弥陀）サ、（観音）サク、（勢至）が刻まれています。

下部の碑文によって、この坂を利用する念仏行者たちが悪路に苦しむ人々を救うため、目黒不動尊や浅草観音に参詣し、通りがかりの人々から報謝を受け、これを資金として行人坂に敷石の道を造り、この成就と往来の安全とを供養祈願したことがわかります。

施主は西運で元禄16年（1703）の紀年があり、江戸と目黒の社寺を結ぶ重要な参詣路であった行人坂開発の歴史を知るうえに貴重な歴史資料です。

平成3年3月

目黒区教育委員会







障害者就労支援施設  
大内寺ボランティアセンター 建築  
子坊





西運上人の石碑



# 八百屋お七と

## 吉三(西運)

江戸時代本郷の八百屋の娘お七は天和二年(一六八二)の火事の際、自宅を焼かれしばらくの間、駒込の円林寺に仮住いしており、その時に寺小姓の吉三に恋したという。お七が十六才、吉三が十八才でした。

恋こがれたお七は、吉三に会いたい一心で翌年自分の家に放火したために、江戸市中を引廻しの上、鈴ヶ森の処刑場で火刑に処せられた。

その後、一方の主人公「寺小姓吉三」はお七の処刑後、僧となり名を「西運」と改め諸国を行脚、後に大圓寺の下の明王院(現雅叙園)に入ってお七の菩提を弔うため、往復十里(約四十キロメートル)の道のりを浅草観音まで夜から明け方にかけて鉦を叩き念仏を唱え、隔夜日参り一万日の行を二十七年と五ヶ月かけて成し遂げ、お七が夢枕に立って成仏した事を告げられたことから「お七地藏尊」を造った。又、西運は多くの江戸市民から浄財の寄進を受け、これを基金に行人坂に敷石の道を造り、目黒川に石の太鼓橋を架け社会事業の数々を行った。

摩尼車







淨財 六地藏



